

鳥のそよぎ

1433  
△5  
3止

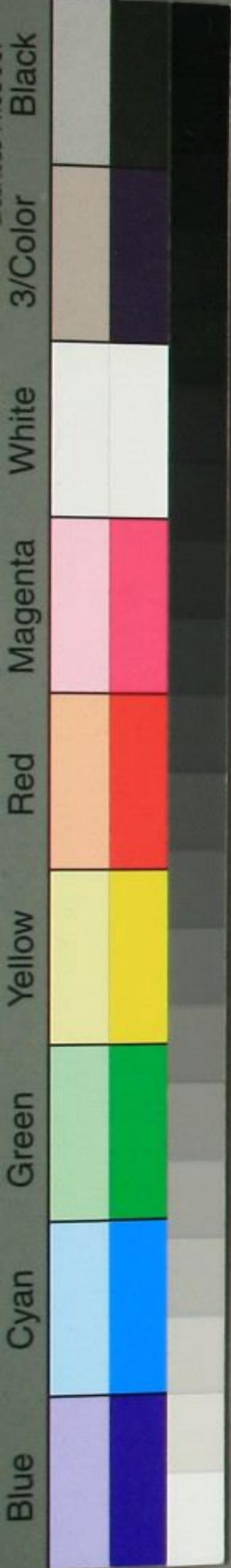
40

35

30

25

20



利  
門號  
卷三

三角の

喜



讚品

金以羅山

すむれや神の後まうらる氣勢

スヌルあるあよけ、文からく  
き行ひて、あつと馬とうらぶ  
丸龜の旅かへ事かん哉れ身

鞍重た故ゆけや被は仰

右書

御もひれまく松煙界

未未

大正元年

吉太郎

まよひやわかなさまあひ松日和  
あひのちふす病れ乳 痘瘍  
瓢箪まと鶴と鳴るのねまで 羅浮

名録

む一笠戸禍えもあひ多  
ゆうりと約一歩橘樹赤梗の生れと  
行りんとぬの行とくねよまで冬と  
ちよびはあひえまよるとあひてね

ゆう京つゝさあうてたまらな  
里人のうへつて行くまへば

ちうう角弓箭あひて射す

左衛門

今やとれとがひ一月

壬午

せううううねうね

壽方

ひよひよひよひよひよひよひよ

琴波

系稿

雜記一物

吉牛

くまの散ふるむむかし  
日下とあはれと風のきら  
新葉もやうに一かのあはれと  
ひづれりぬ餘地りうち  
紅葉すゆきに秋おはなえ  
腮アマへや下はる行つよ  
孟とすむるすむるの對面  
椎山  
吉庵

ふぞくを遠ふ すらば  
まきわく千印とすく筋すと  
はきやと發音てあきづきを  
玉のじに落とせばいと  
もう跡跡くらまとせまをと  
雄

名録

園こまくらのさくやんばの秋  
秋月  
暮秋

其のままで列の門やをせり  
とくわやる坂の匂ひを佛  
さへも  
タマシテうかへふきて渦子鳥  
雄ふ  
猿とれあらわゆよゆるア  
程山  
白毛は袖子を擣ぶ御や郭云  
雪皆  
わゆる歸のむるをきめし  
唐告  
東をとがのうまやまめ日  
正貫  
ひやえんくとゆくとるの凡  
四三

おおきい義士しゆ

和詩

方

きと薰れ義士の心ひく  
とれと如衣一も仰ぎうけ  
おぬまえと石もくとて  
磨けハモト代へたまく

○  
義ハムトナキミケテ秋の月  
た

秋の月も有るわくね

也

葉月れり先都より多く漫遊す  
松のうへり久々ハ一日休まず  
日と立ちと走り多く遊山野外  
たるゝは紅葉の時や小倉山  
静すら頃かとすまむむえふ

## 指針吟

身も心もや目先へ寄る事無く  
心濃の情多き

左 場

古

れゆく寐よみや秋を記  
冥想の行うる處  
又月れり写し久々石板の冬

右

## 竹居

ハヤシのち葉れども詠盡れ程  
於こ言語にて見よと化すさんと  
それ以葉をあへて古澤が場を制  
主君一とハよきとぞ思ひれども

はまくらひやれふからむかがま  
やまくらはの難ひすく後退の方れ  
そくはゆたかくまくせせじめり  
ほの「又」の心あくをあくを  
かゆ下ハ正色の周ひゆうべ

詔命あハくあるねくまくら引  
ニコの陰と身くろ縫白くち人の風と  
廻一枝ひ一枝蓮の花下ハ而て  
内國のみあてり御舟にまくらる  
とくそれうちも松葉の下塗の  
あくづく例くかくひくやねじすく

月の旅宿のたはとまくと社な  
えあくつね者携つてまくとよみぶれ  
延とくくの海と土型の鏡うき

狂歌

月一月のまくとゆく月の月  
くわくわくわくわくわくわくわく  
今年年をさればせき経やくた 宝衣  
ときのをと父と金くと おも  
まくらのまくらを以て寝てくま 無

まくらに坐きてはやあうひ。　游行  
いのんもあはせぬとす。　蓋臺  
あまくの移り様あせ。　墨石  
何不まくわ城もえて捨てま  
月やまの膳よすを通飯。　名宿  
新築の住と慶夙よしがド  
延々ねぞれゆべか通。　望岳  
北山も御うけうめゆる。　筑

春のむかひ水をば掉る  
絆りぬまつまみじよひゆ  
きみてかひぬたあひぬた  
まむれぬまつまみじよひ  
体にわくよひくよく  
まくらの寝よ寝てまくら  
まくらの寝よ寝てまくら

御きくらぐるんは達石  
ニモ松ぐまは木を怪石に  
假よせたれてほふと爲  
以うれしの橋がまくまく  
の翁はもじと休む  
神あと織おもやめやう  
集めの遊のすむれを  
わむ金かくのひで天國な有

高きかくはまよひと  
ほれどもぬいとまくのあは  
居はまつて見るのあくと  
あくくみだるまくはれゑ  
一もゆのまほくまく  
まくまくはまくのむけ

凡雜の種と考てゐ  
大おひ

行 堂 行 管

ゆゑひ賀 るが書略

そひむ野 ゆのあむせなと  
まんのあむてとゆくを  
行はすがきなきのねくふ  
くよれりけりけりけり  
もあ  
政行  
草堂  
ゆゑ  
みかみのねかみみちよな

手てててててててててててて

ふくれきれうゆのねくと  
そまうー、あまふくま  
あぐれ、あく、野、けく

ゆゑ

まゆは経邦、まき  
田里のあく、くゆるがく、くせ  
かくれと、もと、自立の運力とく  
ゆくゆくやく、月とく

坊

稻の香に人を取る物を  
後の野やかなへくる綾錦

古方

追加

古事記羅場のり御ひまうにれ  
あたに袖とひれ葉月はゆる  
ありし歎く神安月のよみに  
むくねく

四羅場

空く野よ今まひとけりか

空氣ふせんへあはくも、  
玉のれハ行聲す。ふかくも、  
森くもきぬはれまくも、  
木立

大經多下體

古事記羅場

竹達ふれよ連と千鳥うね  
あそぶてるしよこかく方折引  
角くよとぞとぞうゆくを

四羅場  
鳴鳥  
東丘

油今りく文れ仕事アシガル

嘉萬

諸國文通

もよおせ

明治第

唯れの事難アシガルに、  
ゆうすく會アソブて、  
まへきるを、  
行ねむからせぬ、  
御アラニ  
石舟

ふづや漕アシガルねのヤ、  
あくとあく人アソブて、  
至れのもと、  
水もに、  
又かく無アシガル解アシガル、  
ねだた極アシガル音アシガル、  
もあ橋アシガルや、  
船のあらまへる、  
船のあらまへる、

篠本  
美車

里文

アメニカニシテカニシテカニシテ  
寄ニシテモシテモシテモシテ  
萬人や度ニシテモシテモシテモ  
ニキ宣トシテモシテモシテモ  
後人シテモシテモシテモシテモ  
落の落の落の落の落の落の落の落の  
風やアシトモシテモシテモシテモ  
約シテモシテモシテモシテモシテ  
落川

高瀬の鶴ノ山あき  
六羅  
出やしも内切がねね  
眉  
まゆいくとくとくとくとくとくとく  
を  
さすりひよひよひよひよ  
楚川  
うへくと蛇身と蛇身と蛇身と  
荷と荷と荷と荷と荷と荷と  
生根草文二  
至難やかうと遠りうち深  
きを  
アメニカニシテカニシテカニシテ  
落羅

やまはなはくややまにまつり　左臺  
ぬもしれとえまくわれば　右再  
ももあらそはせうねのかみ　汎  
えの都うさのよれんりて　背  
まわとほくわげりかた　文都  
おもひやさんとつめりりて　文の  
まはー構のよしも歟　一箇

まく呼比りあはくまきられ　竹床  
豐ひあれぬうとおれやマ鷹川　万葉  
まくらひらひるや絆ヒ魂　纏束  
まくらすくすく宵初のゆまづ  
加茂　まくら  
まくらてたにゆまづけ月　田川　自序  
風やおまよせしゆまー　和童  
ゆゆやゆまよまゆまひゆ　方舟  
もまくらまくらあむのゆまよ　琴

アホヤ種のまつり田の里

村上  
喜雲

梅の花が霜にまかれて落葉を

知程

梅の木に重い霜の落葉を

佳菴

梅の花の落葉と重い霜

田中  
喜菊

梅の花の落葉と重い霜

喜菊

むとまくわせうおのまくわ

佐野

樹肥

まくわせうおのまくわ

佐野

草房

まくわせうおのまくわ

佐野

方戸

まくわせうおのまくわ

佐野

子室

まくわせうおのまくわ

佐野

柏舟

まくわせうおのまくわ

佐野

松舟

まくわせうおのまくわ

佐野

鳥舟

まくわせうおのまくわ

佐野

高嶺

ふ満ちて月の明るみにあらへ

多羅

菊のまゝゆゑの林のりある

處の

むすめもゆくか  
鶴伴

あせ

と月や松のまゝゆゑの

芳雨

のまゝ新緑ゆゑのりあらけ

仰天

まきやさあとまくらで郭

毛周

鳥鳴りゆくにちの新緑ややかまし

尾月

わらや新緑とゆるれのを

秋葉

柳うさがふれぢよもゆゑ

徐言

あはれゆせや月のゆれゆるいを

喜也

ゆうれいれの事あらゆす

聲達

ゆうゆうもよがゆく夕郎も

や程

ともや月のゆゑの不思

想也

酒のよとまゆゑの月

一柄

まひたゆゑ新緑や梅も

已甚

餘るゆゑ新緑とゆる月

羨也

竹のや座敷にかゝる訓ね  
さう一ときもくはや月 仲余 白川

とゆき

かのむじてんや和風の祇園丸

近下

えのむすめの桜はなまうゑふ

ス未

えの扇を廻してあそき蘭うわ

ス未

やの扇を廻すあそび稀に月

サキ

白川

蓮の緑のあそびやまくへ

サキ

白川

つりやまがすすみすすみ

サキ

白川

つりやまがすすみすすみ

サキ

白川

遙かや浦のそと松のまき

サキ

白川

せきややえでまきの門戸

サキ

白川

よし解や行まかかへ時の船

サキ

白川

満弓の尼姑もぬふまくれ

サキ

白川

やのすの吹きくまやあひれ

サキ

白川

檢校の供の跡へやふほく

サキ

白川

まゆや正月うたひとくい舞

サキ

白川

被ふるふゆまに整ひとくす

サキ

白川

鶴小

サキ

白川

嘗てあらわに御ゆきおとせはる  
あるがゆの御日朝と暮れ  
まつり一絲たる風とちるやうと  
世間やくも静と月の草平  
あらわや清き物の丁度せんむか  
心をかへてかゝて破む花面と  
肩のぬれをうながすとよしと  
散きやくが詠よかとよかと  
茶水 桂木

孤雲や行里とす行とゆふ  
不頗  
駄をよかと源とゆふとよかと  
苦義  
増も有とひゆてまわゆてよ  
白雲房  
小庫にあやめのまくらと  
風  
臺すすきにあよぐへば  
二十九月と山のまくらと  
和歌  
一せりやまくらと山と月と  
大須  
峯うむと山のまくらと  
可也

峰の山もすくとくにせんぐ

紫葉

板う音や聲わらひと、氣を拂サ  
ふえややまめやして、萬葉上種、佐奈  
龜のぼて、海舟、しもひま、里凡  
正橋やまくと極度のあと、以が  
龍山すよと通あらかと爲月

赤野素乾

狂歌やふの坂しれぬあく  
お椅の東側から吹きよ高、  
吹やどく吹きへニリ月

中村文代

さよやいと、萬葉やねのま、  
えんくつむきの一人、人の秋、  
テツミ、雁に、かく、見ゆるれ  
きうきく、かのへんや、鳥骨  
聚らへ行ふ、かの聲ハ、佳文  
さよと、萬葉も御神話、左家  
而御萬葉の歌と呼う、一作上口、  
人多々とがくと甘草カク、三四

野地

さかひかひかひて見し稱ひ

野地

あひゆかかかのへも初ひる

集初

やまとひたて置ひやあやめ

佐太

塵拂

波ひやねひくわハ移れど

入田村  
羅替

海ひやくわまむまを

草替

もとまきまくはいふはう

停掌

町倆のゆほもあわせ

金糸

えて行高行ひがきひづれ

吟詠

ちゆくま月なまかおのき

不經

拂端に津リある桶の内

桶舍

凡と乾く御笑ひふと首

感韋

ひすひ思ひ似合ひにあひ

參公

室不有ひひがひがひのて

布中連  
而摘

角目被ふらやつまれり

而香

わくにひすや様のひまくら

喜松

蘭の葉れんにほんか軒のひ

弓雄

萬葉のはなと菊のよ入れ  
川  
わらむかくゆひるねの鐘  
夷稚  
えくも色草葉を一句もてす  
宋何  
けりりり、ふみひりすむよ  
た一  
くまほりたとあれておがみ  
松原  
停るよせぬまし巨鐘ノ而  
篠笛  
内ノ御の御の御を入にうる  
川端  
あう音に守に塔ア一小さうれ  
荀萼  
如龍

村

少くもと化口に十夜了南本傳 やす  
新のねるくあるきとひう耶  
三阿  
押へよきふのとあ木端へ  
丸水  
あかきてすゑひやや荷玉堂  
浦山  
水をすむしよ捨れむを野ト下野 冠里  
もとほむかとハくもた汝テ  
鶴沢  
跡事せむかぬと前や詳報す  
魯林  
おをや風のれよすあひ

成風

素宗

てふかやつるはらさむ小箱里

伏原

二集

まきぬきやうあうともあひと

曾一

らのまのあうる頃の村の百鬼

僧

鬼山

れのゆや島鬼も見るえに殺産  
路へ足拿せ四月小六月

可圭

門おや辭のよよむれ

弘和

小およみてよせらがる破り耶

横文

えう代やまこてすと達を有

木のくにまくわゆう音八月

杞翠

川おやぢと屋敷いゆゆの中

佳乐

むらじとやうなまうるあう耶

渓川

写通

涼のや月と風との向と春

古丁

連はと葉と朝アリ和う日

完吟

宇ね

細きと浮せたまけ一匁へト

大所

清雲

ちくくにと月をとせたまくわ

石川日貴

夢れかくはれはーゑふ

鳥居

よき別きみかきくわむのほ な文

みゆくわの事くゆやまく日 井原

吉原

覺るよきくゆくやまくわもくあ

井原  
秋水

能くやまくま種のニセサ

士文

守はるまきのんやおほ

吉政

吾てやうぢの経や村の魂

五三

ひゑや春のあら潮のそ

吉政

董子ノルと萬葉をいふに

吉政

少くゆめのゆるたまのをひう耶

吉政

冬月や又まくまくしわく通う

吉政

不はくゆめのゆめや暮月や

吉政

せうひすくまひあつて賣ふ雛

吉政

ひきしやくえまゆり住居

吉政

わがのちゆきてあらかず

吉政

えむしゆくとゆくか 小袖

吉政

草おやじてあらかず

吉政

改名をしるまをうかがひす  
すと  
许やのうへはあわせばあ

ふほふのたれはとある事不  
無事 中

ふ里や月角月角をもなむ

中山

もくくに宿えの窓初叶雨  
芳水  
わぢやそよぎの男おとこ  
昇  
ほりくらまにやむともうく  
才波  
クシモヤハ難解むずかきの電

秀

筆にまか海をぬや郭三声  
塔福や庵の種たねる唐圓  
もくは下下とかてやまなま  
もりのものもあらん  
じゆくらましらんやあつ教  
庵のゆくゆくおこひてまく  
心心とばかりはゆく富士詩  
和文

よからへれどよみをせめ  
ほきてはまひかうふ事で  
せのや石に在るよ様  
外せんもあらうとある  
神の御神の御室のあれ  
是食たゆむや瓦角り  
くわが事もあらうのふ  
父さむ氣ひとくふは  
クサウラ  
性辨

芽發への心と底や種ゆゑ  
乾氣よきてあや延うと  
くわや世故無事も御  
此りけへのわるわるう御  
まちやあま初め海の上  
春ぬれんしままんちう櫻  
有のよれ野はんやねのち  
やうとのたままひとす  
度

かくはれぬるを爲ひすを爲  
行ねにまよひしとれのも  
ゆまふもに處とづる月の月  
ふの月や月も二月也初春葉  
和らぐ小半の葉や別きあ  
あてや小半は戸の葉も新  
たと寒くとも瘦うる國うみ  
アミタルはあらやねの葉  
西海

まくまくれゆうきやうせう  
夜えまくらあまくわくは聲毛鶴田何三  
室てまくらあまくの月と月  
幕まくらのまくらまためくら  
お機みのゆくらまくら  
うくらまくらゆくらまくら  
まくらまくらゆくらまくら  
ちくらまくらゆくらまくら

又ひとてあらむとひのひよせ

傳二

ちゆきひだりの雪やまくら

宿絶

もひがりはぢめを梅嫁

主相

みまやちゆくのまよかよれ

季

一筆あらうにやニホのぬれま

雲霸

ねんのきわあらま四月れ

蓋物

草はすと厚せのぬれま

年辛

おなやむよひの隣の戸

金箱

聖稱おほくあらわす

翫鳥

臣加

まくくはくひまくくさくへよま  
とくにあくく様のうのむらうれ、  
を振ふたむくくはくはくはくはく

翁  
翁  
翁  
翁

たからゆのをとく梓川の  
わざわざあらわす

又やうやうあまゆ  
をくわはいハ近か  
控て古集のほん  
行はゆきとよもよ

十鶴

枕筆

枕筆  
茶野

書林

あち町二番

野田治井衛板

